

陸前高田市における医療救護活動について

3月11日に発生した東日本大震災は、観測史上最大のマグニチュード9.0の大地震と大津波で多数の死者・行方不明者を出す未曾有の大惨事となりました。この大震災によって多くの尊い命が失われましたことに心より哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様およびそのご家族の方々に謹んでお見舞いを申し上げます。

千葉県から岩手県陸前高田市への医療活動の要請があり、5月11日から15日までの5日間医療支援に行ってきました。スタッフは外科の太枝医師、内科の矢挽医師、堤、和栗、松尾看護師、古川薬剤師の6人チーム。震災からすでに2ヶ月が経っていましたが、寝袋持参、食料飲料水も各自調達、交通手段も自前で現地入りするなどすべて自己完結型が求められていました。緊張と不安が交錯するなか、我々の車は峠を越え陸前高田市に入っていました。道路の脇には瓦礫の山が連なり、泥で覆い尽くされた原形を留めない家々、無数のひしゃげた車。陸前高田の市街地は津波で壊滅状態となっていました。想像をはるかに超えた状況を目の当たりにして車内の誰もが言葉を失っていました。震災の翌朝のテレビ報道で、病院の屋上から白衣の人たちがヘリコプターに救助を求めていた映像を見た人は多いと思います。その病院が県立高田病院です。4階建ての病院に津波が襲いかかり、その高さは4階では胸元まで達したことでした。入院患者は全員無事でしたが、職員の中には亡くなられた方が何人もいたそうです。

(写真は左より全壊した県立高田病院、※被災翌日の屋上での救助風景、※建物内の被災状況 ※一部写真は県立高田病院の上野正博氏の提供による)



県立高田病院は米崎コミュニティセンターというほんの小さな建物内に仮設の病院を設置していました。会議室のような一部屋に、医療事務、薬剤室、検査室、医療物資保管部署などが仕切られ、隣の部屋は卓球台の板やカーテンで仕切った6つの診察室。玄関には受付けブースがあり、まさに野戦病院さながらの感じがありました。そこに千葉県チームを含め全国から（九州から北海道まで）の医療救護活動チームが集結して陸前高田市の医療を支えていました。

(写真は左より事務局、薬局、医療チーム全員の朝のミーティング風景)



08:30からのミーティングでは前日の各仮設診療所の受診者数やインフルエンザ、ロタ、ノロウィルスの発生状況が報告されます。県立高田病院のスタッフを中心として医療保健行政がすべてここから発信され統轄されていました。

千葉県が担当した仮設診療所は市内の小友（おども）地区にありました。小友はリアス式海岸の半島の付け根にあり、陸前高田市に開いている広田湾と太平洋の2方向から津波が押し寄せ、それがぶつかり合い、その渦流が直角に山を駆け上ったそうです。チリ津波の時は両方向の津波がかろうじて合体した程度だったので、今回の津波は地元の人たちにとっても想定をはるかに超えるものであったとのことでした。田畠は海水につかり、磯の香りが立ち込め、そこにかもめが羽を休め、ぽつんと漁船が横たわっており、全てが非現実的な光景がありました。

（写真は左より被災小友地区、小友仮設診療所・診療風景、小学校体育館内避難所への往診）



仮設診療所・小友診療所は東部デイサービスセンターという介護施設の一部を間借りして開かれていました。診療所には毎日60名位の患者さんが受診します。多くが高血圧症、高脂血症、糖尿病などの慢性疾患でした。ほとんどの方が家や家族を失っているようですが、淡々とした表情に逆に我々が力をいただいたような感じがしました。診察終了後や土曜の午後（休診）などには、血圧計、酸素飽和度計などを持って避難所や仮設住宅に健康相談に廻りました。不眠、強度の不安、うつ状態の方に対しては、やはり千葉県から並行して派遣されている「こころのケアチーム」に紹介する段取りになっていましたが、その数はあまり多くないようでした。

あつという間の5日間でした。次の千葉医療センターのチームに引き継ぎが終り、これから帰路につこうという時には複雑な気持ちになっていました。陸前高田に対し非現実的な世界と思っていたものが、すでに十分に現実的な世界として受け入れている自分がいました。また明日からは非現実的（？）な千葉での日常生活に戻っていこうとしている。現実と非現実が混沌となるような壮絶な体験をしたのです。この貴重な経験を何かに役立てなければいけない、誰かに語り継がなければならない。

今回行動を共にしたスタッフは当院の災害対策委員会のメンバーであり、将来千葉に起こりうる災害に活かすべく決意を新たにしました。

（記事： 副院長 太枝良夫）